とちぶん会報 No.77

2024年10月10日

栃木県文芸家協会
発行人　福田三男
事務局　栃木県宇都宮市立伏町462-56　吉田稔

夏季講演会及び暑気払い・懇親会を開催しました

8月18日(日)に栃木県教育会館において、当協会主催の夏季講演会が開催されました。講師には、宇都宮大学名誉教授、社会学博士の田巻 松雄先生をお招きしました。

演題は「共生の理念と意味を考える－下層の人々に注目して－」会員合計17名の出席者数でした。

田巻先生が夕張で青少年期を送りながら社会構造を意識するようになった経緯、そこから国際学や社会学に携わり、そして日本で学生生活を送ったものの、徐々に転落していった1人の外国人にフォーカスを当てた内容でした。現在進行形で起きている在日外国人の問題、そこに対して具体的な解決策に取り組んでいる田巻先生の講演は、日常生活を送りながらなかなか意識することのない、とても考えさせられるテーマでした。

とても全部をお伝えできるものではありませんが、当日参加することができなかった方も多数おられますので、講演の概要を同封しております。よろしければ、そちらもご一読ください。

11月10日～11日懇親旅行が行われます(南平台温泉ホテル)

秋の懇親旅行を以下のとおり実施します。会員の皆さん、奮ってご参加ください。料金や内容につきましては今回も、高杉副会長のご厚意により特別プランで計画されています。

宿泊しない方も参加がしやすいように、11月10日のみの「日帰りプラン」もございます。

○ 11月10日（日）
- 10:00　宇都宮駅西口トナリエ前の停車場に集合（高杉副会長手配の車またはマイクロバス）
  ※自家用車で直接行かれる方は、那須小川ゴルフクラブへ11:00に直接集合
- 11:00～　昼食
- 11:30～　那珂川水遊園または広重美術館鑑賞（入場料金は各自負担）
- 12:30～　南平台温泉みなみ座観劇・舞踊ショー鑑賞
- 15:15～　南平台温泉ホテルチェックイン・入浴
- 16:15～　懇親会（カラオケ）・日帰りプランはお弁当が用意されます
- 18:15～　宴会～2次会（カラオケ）・ホテル1Fの内風呂は朝まで入浴可能です

○ 11月11日（月）
- 7:30～　朝食バイキング
- 8:45～　チェックアウト・記念撮影
- 9:30～　黒羽芭蕉の句碑めぐりまたは与一の里めぐり（入場料金は各自負担）
- 12:30～　昼食
- 13:30～　大田原市観光または那珂川町観光

○ **費用**　宿泊コース14,000円・日帰りコース7,000円（お子様4,000円）※税込

○ **申込み方法**　高杉副会長宛に電話連絡→ **090-7400-0936**
またはメール→ nobuhiro-shinozaki@nasuogawagc.co.jp
メールは、右のQRコードを読み込んでも送信できます。

※締切　10月31日

※ 入館料等が必要な場所は参加者負担です。見学場所や時間は変更となる場合があります。
※ 初日の昼食(那須小川ゴルフクラブ)、カラオケタイム(南平台温泉ホテル)は高杉副会長のご厚意により無料です。
☆ **南平台温泉ホテル／栃木県那須郡那珂川町小口 1342　電話 0287-92-3211**
☆ **那須小川ゴルフクラブ／栃木県那須郡那珂川町三輪 1283　電話 0287-96-2121**

第 2 回編集会議を開催・『朝明』第 13 号は編集へ

朝明第 13 号の原稿提出は 9 月末日に締め切り、総数 77 編(前号は 76 編)の作品が集まりました。
各部門の提出数は以下のとおりです。( )内の数字は前号のもの。

・創作(小説) 17 編(14)　・評論 2 編(3)　・随筆 9 編(8)　・詩 10 編(10)
・短歌 6 編(9)　・俳句 2 編(3)　・川柳 5 編(6)
・特集「再スタート」26 編(23) テーマは「かけがえのない言葉」

この他に、特別寄稿として「文芸家協会五十周年によせて」が掲載されます。
10 月 4 日(金)に第 2 回編集会議が宇都宮市中央生涯学習センターで開催され、各部門の編集委員 7 名による原稿確認・編集作業が行われました。
次回の第 3 回編集会議は、「おかりや」にて 11 月 8 日(金)を予定しています。

会員から多額の寄付金をいただきました

会員からいただいた今年度の寄付金は、10 月 6 日現在、32 件 59,000 円が指定口座に入金されました。寄付金は、今後協会の安定的な財政運営のために使われます。誠にありがとうございました。

§寄贈書籍の紹介§

○「同人誌ｒｅｒａ」(第四号)／発行所・生きがい創造舎 事務局／編集・生きがい創造舎／発行日・2023 年 12 月 12 日
・12 名の作家による短編小説が収められている。当協会からは、柴崎幸子、相馬龍久、福冨陽子、石塚蓉子、島田トミ子、大泉耀子(古谷耀子)、鈴木あぐり、国母仁、寺崎暁生、の 9 名の会員が作品を寄せている。151 ページ

○「栃木県現代誌年鑑 2023 年版」栃木県現代詩人会編／発行所・栃木県現代詩人会／発行日・2023 年 12 月 2 日
・栃木県現代詩人会会員 33 名の参加を得て、会員の 1 年間の成果を集約したもの。当協会会員 5 名が作品を載せている。

○「那須の緒」(第 22 号 2024.5)／発行所・貝塚津音魚／発行日・令和 6 年 5 月 21 日

○「那須の緒」(第 21 号 2024.1)／発行所・貝塚津音魚／発行日・令和 5 年 12 月 11 日

○「令和川柳選書 ほぼほぼとほぼ」三上博史著／発行所・新葉館出版／発行日・2024 年 2 月 26 日〔著者からの寄贈〕
・著者の第 2 句集となる。平成 30 年から令和 5 年までに詠まれた雑詠作品約 1000 句の中から、252 句を選んで収めた。95 ページ

○「－ラジオ・方言コラム－あったらもん」嶋 均三著／発行・㈱栃木放送／発行日・2024 年 3 月 3 日〔著者からの寄贈〕
・CRT 栃木放送の開局 60 周年を記念して、番組内で著者が読んだものの中から抜粋して加筆・編集し、書籍化した。252 ページ

○「同人誌ｒｅｒａ」(第五号)／発行所・生きがい創造舎 事務局／編集・生きがい創造舎／発行日・2024 年 6 月 6 日
・12 名の作家による短編小説が収められている。当協会からは、柴崎幸子、相馬龍久、福冨陽子、石塚蓉子、島田トミ子、大泉耀子(古谷耀子)、鈴木あぐり、国母仁、寺崎暁生、永井想、阿久純の 11 名の会員が作品を寄せている。132 ページ

共生の理念と意味を考える　-下層の人々に注目して-

2024 年 8 月 18 日
夏季講演会
田巻 松雄先生

●下層とは　「下層の人々を３つのグループに分けて考える」

1 つめは、ホームレスという風に言われてる人たちです。
このホームレスは、日本で今約 3000 人ぐらいです。厚生労働省が毎年 1 月、目視調査をやっているんです。目視ってのは、目で見てカウントしていくという調査ですね。 2003 年が 1 回目の調査ですから、 20 回ぐらいやられています。1 番多かったのは 2 万 5～6000 人です。
日本でホームレスの人は何人いるんですか？みたいな問いかけをするときに、ポイントになるのがホームレスの定義なんですね。 どういう人をホームレスとして捉えるかっていうことなんですけど、簡単に言うと、**日本の厚生労働省の定義は「路上で生活してる人」だけです。**
ですから、ネットカフェにいるとか、あるいは友人の家を転々としてるとか、安い宿がたくさんある街がありますけど、そういう街に住んでいるような人はホームレスにはカウントされません。アメリカなんかはシェルターに入っている人もホームレスとカウントされるので、定義が広いですね。

2 つめに、未登録外国人、いろんな事情で在留資格を失っている人です。そういう状態で日本に暮らしている人は、現在 7 万人ぐらいです。1 番多かったのは 1993 年ぐらいで 30 万人。その 7 万人の人たちは基本的には目視できません。どこでどんな生活しているかなかなかわからない。なぜかというと、未登録外国人であるってことがわかれば退去強制させられますので、なるべく隠れて生活してるわけです。 **未登録外国人は日本から出ていってくださいということなので、社会学でいう「排除」の対象になっています。**経済的に貧しいこともそうなんですけど、社会的な排除の対象になっているということが、むしろ下層という人たちを指す上では大事だということです。

3 つめの下層は「将来の下層」って言い方をしますが、外国籍の子供たちです。
日本語指導を必要とする児童生徒、 これが 6 万 7 千人という数字が出てました。約 8 割が外国籍、2 割は日本国籍です。 お父さんお母さんのどちらかが日本人だが、家庭の言語環境が日本語ではない、そういう子は結構いるんです。 そういう中で、小学校中学校の授業受けてもよくわからない、日本語の能力が低いためです。特別な日本語指導を必要としなきゃいけない対象を、文科省が実態調査してるんですけど、これが 6 万人を超えています。

どういうことが起きるかというと、まず普通の一般の試験を受けると、高校に受かりません。特に国語や社会が極めて難しいです。
そうすると、**中卒の外国籍の日本語がよくわからない人が大人になっていくわけです。**安定した仕事、安定した生活にたどり着けるかというと、非常に厳しいです。そういう子たちをなんとかしないと、将来非常に厳しい生活に追い込まれるということで「将来の下層」という言い方をしています。

●問題意識の原点　「青少年期に夕張で感じたこと」

僕は改めて、自分の問題意識の原点は何かなっていうことを考えた時に、生まれ育った夕張という町と田巻家という家庭に思いが至りました。
夕張というのは、どんな町かというと、炭鉱の町なんですけど、1つは通称北炭、それからもう1つの三菱というのがありました。ただ、三菱は夕張全体を対象にする担当会社ではなくて、ちょっと南の端の方にあるところだけを担ってた炭鉱会社なんですね。ですから、北炭が9割の石炭産業を独占していたという風に言っていいと思います。
僕自身は炭鉱で働いた経験もないし、うちの父親も炭鉱部ではありませんでした。階級社会としての性格が極めて強い町でしたから、非常に裕福な層と貧しい層が2極化していました。うちはどっちかというと貧しい家庭でしたので、下層という意識が当時はなかったんですけども、例えば、北炭という会社の社員と従業員で全く違います。住んでいるところが違う、交わることもほとんどないような環境でしたから、階級社会的な性格が非常に強いんですね。

僕の親父は職人でした。炭鉱では石炭を掘っていく時に、アーチを組んでいくんですね。その時にたくさんの木を使いますから、その木を切る、そういう仕事をしてたんです。ただ正社員ではありませんでしたから、昼の12時間で仕事が終わって帰ってくることもありましたし、それからボーナスはない、いわば非正規の臨時的な労働者だったのです。
目の前の家にいたのは、どっちかというと上層部の人で、その上層部の息子と僕が同級生でした。同級生とのいろんな思い出があるんですけど、子供心に貧しさと豊かさを感じることがありました。登校する時に一緒に行くんです。ある時、僕がちょっと早く家を出たんで、その彼の家に行って「朝飯食ってるから待ってて」って言われました。ちょっとドア開いてたから見たら、マグロが見えました。衝撃でした。マグロはうちは年に1回、大晦日しかダメなものですので「すごいな、マグロ食べてんだ」みたいな受け止めでした。
また、これは本当に偶然かどうかわからないんですけど、小学校の時に自転車が欲しくなって、親父には悪いけど「自転車買ってくれ」と言って、もう本当に泣きついて買ってもらったんですね。そしたら、1日後か2日後に、向かいの子も自転車買ってもらって。
そうしたら、こちらの自転車は最低限の自転車、あちらはいろんな装備がついてる、なんか素晴らしい自転車でした。自転車を見ても、貧富の差が感じられるようなことがありました。
僕にとっては母親は本当に優しく育ててくれたお袋で、怒られた経験がまずないんですね。ところが父親が、非常に複雑な感情を抱かせてくれるような父親でしたね。
働く意欲がないわけでもない、仕事一筋の人なんですよ。でも仕事の数は限られて、働きたくても仕事が与えられない。賃金低い、ボーナスないっていう、親父の力ではどうすることもできないような環境に置かれていて、その貧しさから脱することができないことを、ぼやいていた人ですね。貧乏だっていうことは、その人格とか性格に影響を与えるようです。お金持ちの人に何かの意見を言うことがない。だから、家の中では亭主関白なんですけど、外に出るって非常に弱い人間に僕からは見えちゃったんです。

複雑な思いを感じながら育った、というところはあるかもしれないですね。だから、**どういう父親の元で育ったかっていうのは、僕の社会学に結構な影響を与えていて、それで父親に関する小説を結構読みました。**

●ある外国人の転落　「マツザキさんの 20 年間」

下層の人々ということで、注目してきたホームレスの話と未登録外国人の話をしていきたいと思います。これは、国際学部が 20 周年を迎えた時に記念誌を作ろうということで、下野新聞と当時の現役の教員がみんなで執筆して、そのなかで「ホームレスの泪」という本を書いたんです。 様々なホームレスの人に出会ってきたんですけど、マツザキさんという方が印象深いので紹介します。
私が名古屋に住んでいた時に、6 年ぐらいホームレスの支援活動をして、炊き出しを週 2 回、 それからナイトパトロール週 1 回、それから福祉事務所も週 3 回、それから不定期に病院に入院した人とか施設に入所した人をお見舞いに行くという活動でした。どうしようもなくなって、困った人が福祉事務所に行って生活保護の相談をするんですね。 当時は非常に厳しくて、 野宿している人が 1 人で福祉事務所に行っても、まず相手にされないってことは多かったです。
福祉事務所の対応は、まずは稼働能力があるかどうかを見るんです。働く能力があるかどうか、体調はどうかです。それで「なんともありません」となると、そこで話が終わります。 仕事探して頑張ってください、これだけなんです。怪我とか風邪を引いてるとか、もう高齢で働けないっていう、労働力を失っちゃった場合には、生活保護の相談に乗るんです。
マツザキさんは病弱でしたので、何度も行きました。その時にやっぱり鍵になるのは、就労が可なのか不可なのかというです。よくあるケースは「軽作業は可能」という判断です。医者は「あなたの体調だったらきつい仕事できないけど、軽い作業だったらできます」のような感じです。
「就労可」っていう判断が出ちゃうと、薬をもらって帰ってきて、相談が終わるんですね。
福祉事務所が機械的に、就労可なのか不可なのかっていうことだけを判断して、生活保護を運用するか運用しないか、という進め方ではなくて、その人の置かれている状況にもう少し配慮してもらえれば、全然違う対応となり、本人のためになると感じます。
僕はいろんな人たちを支援してきましたけれども、自ら望んで路上生活に入ったっていう人は、2 人しか知りません。 だいたいが日雇とか、不安定な仕事って就いている環境が 1 番にありますが、経済的な事情で路上に行って、一旦路上に行くとなかなか復帰できない仕組みもあります。
「この世はどんなに努力してもダメな時はダメだし、絶えず偶然にもて遊ばれるし、人による評価は理不尽だし、思い通りにはいかない」ということを、もっとも感じてきた人たちではないかなって思っています。

このホームレスの人たちの実情をできるだけ理解してもらい、少なくとも共に生きるという観点から何かしらの問題提起ができないかな、ということを研究としてやってきました。
外国人児童生徒の転落ということで、マツザキさんを追いかけた「ある外国人の 20 年」という本を 2019 年に出しました。
下層の人が 3 つのグループがあるって言いましたけど、実は彼は児童生徒だったんですね。10 歳で日本に来ました。30 歳でブラジルに強制退去させられました。ですから、20 年間日本で暮らしたんですね。ブラジルに強制退去された後の彼の生活については、断片的なことしかわからないんですけど、お母さんの話によると、どうもホームレスをしているようです。 **つまり、3 つの下層が集約したのが彼、マツザキさんなんです。**

●本当は日本でやり直したい　「課された罰は妥当なのか」

マツザキさんが、どんな人なのかを簡単に紹介したいと思います。
茨城県の牛久市に入管収容所があります。 長期収容が可能な入管の施設っていうのは、日本に 2 つしかなくて、1 つが牛久、もう 1 つが長崎県にあります。
ある日入管から、国際学部の田巻宛の手紙が届きます。入管とは縁がなかったし、彼のことは知りませんでした。便箋 1 枚、手紙が入っていて「もう少しでオーバーステイになって、ブラジルに戻されるかもしれない、**でも本当は日本でやり直しをしたいんだ、助けてくれる人はいないのか**」みたいなことが書かれていたんですね。
ひらがなは多いし、文法上は間違いがたくさんあるし、 10 代の人が書いたのかなっていう風に思ったんですけど、ちょっと迷って、ひらがなで手紙を書いて戻したんですね。そしたらまた手紙が来て、日本語の会話はそんなに問題はないので、 1 回来てほしいと書いてありました。
じゃあ、行ってみるかと思って行ったのが、2018 年の 6 月でした。
牛久の入管ってのは、1 日 1 回の面会しかできないんです。時間が 30 分以内です。例えば、2 人で行って、それぞれ 1 回でもできるんですけど、1 人で複数回はできないんですよ。だから、最初行った時に初めて顔を合わせて、30 分で話せることは本当に限りがあるので、本当に基本的なことしかわかりませんでした。どうも若い時に少年院に入って、そのあと刑務所に入って、もうちょっとしたら強制帰国みたいな話をしたんですね。彼は 30 歳でした。
僕も結構緊張してね、どんな人が来るかわからないもんですから。そうしたら、予想と違ってものすごい優しそうな顔でした。目が優しい人で、ゆっくりゆっくり日本語で喋るんですよ。
こうしてほしい、ああしてほしいっていうんじゃなくて、自分は本当はこうしたいんだけど、みたいなことを言ってきたんですね。これで終わりにしたくなかったので、彼との関係が始まりました。 彼は日系ブラジル人です。日系ってご存じのように、昔日本からブラジルにたくさん行っています。
その 2 世 3 世 4 世は、国籍はブラジルなんだけど、ルーツは日本なので、日系ブラジル人という言い方をするわけですね。彼は 3 世で、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが日本人です。
日系ブラジル人について、日本の入管は「定住者」という在留資格を優先的に与えていた歴史があります。
これは、1989 年に入管法を改正した時に、日系人について「定住者」という在留資格を新しく作ったんです。
たくさんブラジルから来て、出稼ぎ労働者として働いてもらった事情がありました。彼のお父さんは静岡の浜松にやって来て、ヤマハ楽器で 3 年間働きました。一旦帰ったんですけど、ブラジルでなかなか商売がうまくいかなくて、今度は奥さんとマツザキさんを連れてきた、ということで、彼が 10 歳の時に日本に来ました。
10 歳で日本に来て、小学校の時はまだ良かった。日本語がわからなくても、友達もできたし、ブラジルから来ていた女の子のクラスメイトがいて、仲良くしてくれて、まあまあ学校は楽しく行っていたと言っていました。
ただ中学校に入ったら、格段に勉強が難しくなっちゃう、授業はわからない、友達ができない、不幸なことに、日本人の不良グループみたいなものもありました。その不良グループが彼を囲い込んで、非行に走って少年院に入りました。そこを出所してきて、パン屋さんでアルバイトをするんだけど、昔のグループがまた誘います。お父さんやお母さんは残業で、なかなか家で一緒に過ごす時間がなかったので、周りのサポーターもいないので、再び非行に走ってしまうんですね。

今度は横浜の横須賀で、2回目の少年院に入りました。
そこを出て、今度はホテルの清掃をやりました。その仕事は安定していたのですが、自動車工場だともうちょっと賃金が高いよ、という誘いがあって、そっちに行ってしまいました。ところが、リーマンショックがあって、外国人従業員が一斉解雇に巻き込まれちゃいました。不幸にもお父さんも失業してしまうんですよ。非常に家庭が苦しくなって、家族関係もギクシャクしてきて家を出ちゃいました。そこで少年院の時に一緒だったブラジルの仲間と、コンビニ強盗をやっちゃうんですよ、4回。
1回目は未遂だったらしいです。そこでやめてくれたら良かったけど、捕まって刑務所に入ることになりました。そういう経緯なので、刑務所に入って2、3年経った時に定住者という在留資格が切れそうになりました。切れそうになった時に、お父さんが代理で申請に行きました。もう 1 回更新ほしいと申請したんだけど、東京入管は認めなかった。だから、刑務所の中でオーバーステイです。そして、刑務所の中にいると刑期を全うするまでは強制退去となりません。
7年ぐらい入っていたと思いますけど、刑務所を出る日に、お父さんとお母さんが迎えに来て、実家に帰れると思っていました。ところが、その日のうちに品川の入管に収監されてしまいました。色々ありましたが「転落」という言葉を使わざるを得ない20年だったかなっていう気がするんです。

中学校の時にもう少しサポートしてくれるとか、あるいは、今の高校って全日制、定時制、通信制がありますけど、 定時制は複雑なバックグラウンドを持つ生徒でも入学できるんですよ。例えば、日本語は十分じゃなくとも入れますし、全日制で学べないような人を積極的に受け入れるのが定時制なので、全く中学校に通っていなくても入学できる定時制は結構あるんですね。
ただマツザキさんに聞けば、定時制高校なんて知らなかったし、お父さんやお母さんはそんな学校があると知らなかったと言っています。その時に情報が伝わっていて、何かサポートしてくれる人がいれば、また事情が変わったんだろうなと思います。
それで、彼の20年については、 罪と罰の均衡という視点から僕なりに総括したんですね。つまり、**彼が犯した罪に比べて、課された罰は妥当だったのか、ということです。**
刑務所を出てから社会復帰することなく入管施設に収容されて、3年近く収容されている。日本の入管施設って上限がありませんので、可能性としては、も死ぬまで入ることもできるんです。
こういう状況は、世界的に見ても日本しかないぐらいなので、上限をしっかり判断することが必要という色々意見が出ていますが、なかなか自治体が動かないです。
彼は 20 年間日本で暮らすことになりました。10 歳で日本に来て、30 歳でブラジルに排除的に帰るんですね。お父さんお母さん、弟が山梨にいます。生活基盤は日本にしかないので、 生活基盤のないブラジルにポンと帰った時に生きていけるのか、という切実な問題が当然出てきます。
「もう帰ります」って言った時に「いくら持ってるの」と聞いたら「4000円です」って言っていたので、ちょっと募金集めて、10数万、お金を渡しました。それにしても、全く生活基盤がない場所に帰されるっていう罰になっています。家族と暮らすことも事実上困難です。
彼が日本に戻ってきたいと言っても、日本の法務省は上陸を拒否することができます。これは無期限にできますので、将来も許可はしないでしょう。
家族と分断して生活基盤のないところで生活する、その状況に追い込まれるのは、犯した罪に比べて重いのではないかっていうことが僕の結論です。

そういう外国人って結構いるんですね。義務教育をしっかり受けられない、高校に行けない、反社会的な行動に走っちゃう、その結果として在留資格を失ったり、送還されたりします。だから、しっかり学習期のサ

ポートするとか、高校進学をサポートするということをしていけば、 日本で一生懸命頑張って暮らしたいと思ってる人が、日本社会の一員として一緒に生きることができると思います。

●共に生きることが共生　「自主的な夜間中学の開校」

義務教育過程を十分に受けることができなかった人とか、あるいは外国から日本に来た時に 16 歳を超えている人、こういう人たちは日本の中学校で学びたくても入学できません。日本の教育制度って年齢主義なので、13 歳だったら中 1、15 歳だったら中 3、ということで厳格なんですね。 だから、越えた年齢で日本に来た外国人、これから高校に入りたいって言っても入れてくれません。
そういう人たちが学び直しができる場所として「栃木に学校を作り育てる会」を 2021 年に立ち上げました。200 名の会員がいてくれて、年間 1 人 1000 円の会費をいただいて、 自主中学の活動を支えるという活動をしでいます。
今月で 3 周年を迎えました。開校してきた回数は 120 回になって、その日によって参加者の数は違いますが、15 名だったり、多い時は 20 名、30 名という参加者がいます。
完全ボランティアの世界ですので、人とお金と場所っていうのがなかなか厳しくて、場所については東図書館の生涯学習センター（下写真）で毎回借りています。1 回やると大体 2000 円くらいの会場費がかかりますので、年間で言うと 10 万円ぐらいです。ボランティアで来てもらって、誰でもいつからでもいつまでも学べる、無料で学べる学びの場となっています。

昨年の 4 月からは宇都宮大学の教室を借りて、毎週水曜日に開校しています。
本当に純粋に、学びの場を提供するということでやっていますが、 栃木県も 2 年後に公立を設定するということをようやく決めました。 栃木市にある学悠館という高校に設置することを決めたんですね。少し前に基本計画案というのが出されて、パブリックコメントをやりました。具体的なビジョンをこれから作ろうとしてるんですけど、なかなか内容は乏しい計画です。
「共に生きる」っていうのは、いろんな価値観も国籍も年齢も違う人たちと一緒に暮らしていくわけで、それぞれを基本的には尊重し合って一緒に生きていけるような社会が 1 番いいわけです。そういう共生論から外されてきた人たちがいて、その人たちの実情を見ると、1 人 1 人の力ではどうしようもないような構造的な問題とか環境が大きいです。
その人たちにも目を向けてほしく、今日お話の機会をいただきました。